

日本畫科

日本畫科ノ教室ハ五アリテ毛筆畫ヲ教フ 其授業ヲ分チテ模寫、臨畫、寫生、新按、圖按ノ五トナシ別ニ郊外寫生ヲナサシム 特ニ課スル學科ヲ用器畫法及美術解剖トス

模寫及臨畫ハ本校教授ノ畫キタルモノ及古來名家ノ筆蹟ニ係ルモノノ簡易ナルモノヨリ漸次複雑ナルモノニ移リ主トシテ其着想並ニ運筆ノ法ヲ修得セシム 豫備ノ課程ヨリ本科四年マデ之ヲ課ス

寫生ハ初メ草木花實ヲ以テシ次デ蟲魚禽獸ヲ教室ニ致シ或ハ動物園ニ就キテ之ヲ寫サシム 其技ノ漸ク熟スルニ及ビ生人もでるニ及ボシ本邦古來ノ甲冑ヲ著セシメ或ハ裝束ヲ爲サシメ若クハ當世ノ服裝ヲ寫サシメ以テ有職故實ノ實作ト傳彩配色ノ手法ト物象ヲ正確ニ描寫スル法トヲ教フ 是亦豫備ノ課程ヨリ本科四年マデ之ヲ課シ又別ニ物象ヲ正確ニ描寫スル練習ノ爲ニ一學年間毛筆畫時間ヲ割キテ木炭畫ヲ修メシム

新按ハ既ニ學修シタル模寫臨畫及寫生ノ力ヲ應用シ課題ニ依リテ各自ノ意匠ヲ須キ新作セシムルモノニシテ本科第一年ヨリ第四年マデ之ヲ課ス 殊ニ第四年ニ於テハ主トシテ力ヲ新按ニ注ガシメ其間ニ於テ模寫、臨畫、寫生ヲ課シ又卒業製作ヲナサシム

圖按ハ草木菓實ノ簡易ナルモノヨリ漸次複雑ナルモノニ及ボシ繪畫ノ力ヲ應用シテ模様器物ノ圖按ヲ作ラシム 第一年ヨリ第三年マデ之ヲ課ス 校外寫生ハ教員ニ於テ其日ト場所ヲ撰ビテ生徒ヲ引率シ又ハ隨意ニ生徒ヲシテ隨處ニ其風景ヲ寫生セシメ成績ヲ徴ス

西洋畫科

西洋畫科ハ分チテ五教室トシ主トシテ木炭畫、油畫ヲ教授シ又鉛筆畫水彩畫ヲ併セ授ク 而シテ特ニ課スル學科ヲ用器畫法、美術解剖トス

第一教室ハ西洋畫豫備之課程生徒、同第一年、其他彫刻科、鍍金科、鑄金科ニ入ルベキ豫備之課程生徒ヲ收容シ木炭畫ノ描法ヲ授クル所ナリ

而シテ豫備之課程ニ於テハ生徒技能ノ程度ニ應シ木炭ヲ以テ標本ノ臨寫石膏像ノ寫生等ヲナサシメ第一年ニ至リテハ石膏像寫生ニ加フルニ人體寫生ヲ以テシ又鉛筆、水繪具、油繪具ニテ靜物、風景ヲ畫カシム

第二、第三、第四、第五ノ教室ハ西洋畫科第二年、第三年、第四年及研究科生徒ヲ收容シ木炭、油繪具ヲ以テ人體ノ寫生ヲナサシム 而シテ學年ノ進ムニ從ヒ漸次木炭畫ノ學習時數ヲ減ジ加フルニ油繪ヲ以テス 要スルニ木炭畫ノ目的ハ形骸ヲ正確ニ描寫スルニ在リテ油畫ノ階梯タルニ過ギザレバナリ 又別ニ第二年ニ於テハ鉛筆ヲ以テ人物姿勢ノ速寫ヲナサシメ水繪具、油繪具ヲ以テ靜物及風景ヲ寫生セシム 第三年ニ於テハ前學年ニ同ジク鉛筆畫、人物姿勢速寫ヲ授ケ普通ノ靜物寫生ニ代フルニ被服ノ模様、皺襞ノ寫生ヲ以テス 而シテ風景寫生ニハ油繪具ノミヲ使用セシメ時々風俗、歴史ノ課題ニヨリテ水繪具、油繪具ヲ以テ構圖ヲナサシム 第四年ニ於テハ木炭、水繪具ニテ器物、花卉、人物ヲ寫生セシメコレニ據リテ更ニ裝飾的構圖ヲナサシメ以テ前學年ノ被服寫生ニ代フ 鉛筆畫人物姿勢速寫、油繪風景、課題風俗歴史畫ハ前學年ニ同ジ 以上ノ各學年ニ於テハ既ニ學習シタル課目ニ對シ一學年間ニ三回ノ競技ヲ施行シ技能ノ優劣ヲ判定ス

このほかに彫刻科の分の「塑土(原名プラスチック)」の箇所が「塑土」のみとなり、漆工科の学科に「蒔絵製作法」が追加された。

『東京美術学校校友会月報』記事抜粋

東京美術学校近事(一)一七。M・三六・一・三一

年 月 日

○前號掲載後に於ける職員ノ動靜左ノ如シ。

〔明治三十五年〕
十二月五日、陸軍歩兵中尉工學士大澤三之助及囑託教員岡田三郎助

の兩氏、各本校教授に任せられ、高等官六等に敘せられたり。

同月二十五日、囑託教員石井吉次郎氏、本校助教授に任せられたり。

同月二十七日、教授大村西崖氏は正八位に敘せられ、教授川之邊一朝氏は高等官五等に陞敘せられ、教授下村晴三郎、同寺崎廣業、同白濱徹の三氏は、各高等官七等に陞敘せらる。

明治三十六年一月八日、足立厚實氏の後任として、井上縫太郎氏に柔道指南を囑託せられたり。

○年賀交換會 本校職員一同は、例に依りて一月一日午前十一時本校に會合して、年賀交換會を開きたり。

○本校授業始の式 例の如く一月八日午前九時本校に於て、其式を行ひ、正木學校長の訓諭の辭ありて後、御影を奉拜し、敕語を捧讀して散會せり。

○金龍化身神像の噴水器 淺草觀音堂の左側銀杏樹下に新に池を作りて、中央に一大噴水を設けんとは、昨春來計畫せし處にして、其噴水圖案を當校に依頼し來りたるを以て、圖案科にて調製中なりしが、愈金龍化身神像の噴水を建設することとなり、客年十二月より其模型に着手し此程大畧出來したるを以て、近日鑄造に著手する筈なり。

○堺水族館附設の噴水器 昨年來鑄造に着手中なりしが、舊臘末を以て全部鑄成し、目下仕上げ中なり。

○辻村松華氏の出張 靜岡縣久能山東照宮の修繕事業中、木工部の修繕竣りたるを以て此際各部の請負者を會し打合せを爲すに付き、

一月十七日同氏の出張を乞ひ、髹漆部の修繕に關し指示を受けたき旨、申出でたる趣を以て、靜岡縣廳より依頼し來りたるに依り、同氏は十六日午後出發して、同山に向ひたり。

○海野美盛氏の大阪行 博覽會より賞牌圖按に關する取調の囑託を受け、大阪へ出張を命せられたるに付、一月末出發せり。往復凡五日間。

○懸賞圖案の受賞 畫報社に於て募集したる本年の柱曆圖案にて、本校生徒中當撰せしは左の兩氏なり。

一等賞 十二町貞吉（圖按科二年）
二等賞 澤田誠一郎（同上）

教室雜俎〔同〕

○日本畫科豫備 實は疾うに見參致さうと思つて居つたのだが、入學早々で勝手は知れず筆は腰抜け、迎も面白いことの書けやう筈はないので、儘よと放擲つて置いたところ、二三日前から委員の方が矢襖作つて催促の矢を放つので、とう／＼筆の腰を擦つて馳け出すことにした。是は樂屋内のことだが、向ふの方では力彌由良の助はと洒落るところ、處が面白い話柄はなし、締切期日も切腹したので話らぬことを駢べることにした。

さて僕の級は勉強家が揃つて居る。滿更新參とか雛兒とか馬鹿にしたものでもないで、去年の十月頃から新按の競技會が始まつたが段々手が上るやうだ。「寫生は中々甘くなつた」と「荒木」寛畝先生の讚辭があつたのでも能く分る、そんな其處等の二階にまごつている兄さん方！、何時迄も雛兒では居ませんぞ、迂濶／＼すると

其れ！其れ脚下から雉子ではない、鳳凰や麒麟が。

運動は中々盛なもので、各部の部員が澤山居るが、森田〔静也〕君の柔道、三橋〔信吉〕君の擊劍、西岡〔純平〕君の庭球、古賀〔嘉六〕君の弓術などゝ來たら、すばらしいものだそうで、學校中で一番運動の盛なのは、此級である。見給へ！、元氣のある活々とした傑作は、屹度此級の人に依て畫かれるから、古來女に大家は無いではないか、其れと同じ理屈で、因循な男に何が畫けやうと僕等は考へる。それから茲に特筆大書すべきは去年の運動會に、此の級から日本畫科の撰手が二人とも出て、二人とも勝つた。他の科の人々は活氣がぬけたのかしら、二階の兄さん達はどうしたのかしら。ア、是に至て二の握拳は不知不識僕等の鼻の先に行列をするのである。其れで翌々日は早速根岸の岡野で撰手祝勝慰勞會を開いた。當日の正客、伊藤〔貞夫〕、三橋の兩君は勿論、一同肩を聳やかして敷石をコツ／＼入つて行くと、入つしやい、お上んなさい、茶が出た、菓子が出た、一個は一個より甘まく不可言味がした。いや下らぬ話ではない、勝つたから甘かつたといふ丈けの話ではない。皿の上が寂しくなるにつれ話が賑かになつて來たのには或る理由があるのだ。

一 躰假入學中お互に談話もしたが、夫程懇意にはならなかつた。本入學になつても少しは懇意になつたが未だ／＼。其れに初めて顔合はせた人々も居るので、言葉が馬鹿に丁寧で、練瓦塀程ではないが、障子位の隔は確にあつたのが、此會以後といふものは言葉が幾分粗雑になつた代り、非常に親睦になつた。つまり其れだから甘かつたので、此會が親睦の媒介したのである。併し、もつと精しくいふたら、皆の隱藝や、歌や、踊が有るかも知れない。此日一同愉

快を盡して散會したのが六時頃であつた。其後日本畫全科の祝勝大會でもあるかと思つたら、空だのみであつた。(流石に兄さん達は大人振つて居らつしやること)。是れで二人の撰手は日本畫科のほなくて名實共に日本畫豫備の撰手となつてしまつた。

矢張り去年のことだが、伊藤君は我校の撰手として東京郵便電信學校の運動會に臨まれたが、第二着であつたそうだ。今度はマー此位で、蒙御免。

○日本畫二年 撰科諸將の御事どもは既に前號に於て、石島〔文太郎〕君によりて詳報せられたれば、今こゝには本科諸將軍の事を申すべく候、先づ本科にては毛利〔教定〕、牧野〔左武〕、橋爪〔成一郎〕の三君は級中の三星と申さるべく候、毛利君は謹厚にして言葉少なく、特待生の榮譽を擔ふて、室の一隅に端坐し、級中第一の勉強家にして、中々種々工風を凝らされ候、或は無線法を以てし、或は光線を現はすに力め、種々の方法を試みて意氣甚だ盛んに、學べ學べ學ぶべきときは今なるぞ、盛んに作りて大に出陳せよ、よしや不味くして人の笑ひを招けばとて、當然の二年級にあらざるや、又若し幸に良作を出せば、それだけの名譽ならずや、作るべし出品すべし、何ぞ恐れてためらふ事やあらん、とは君が常に口にする所に御座候。

牧野君は毛利君と、すぢ向ひの一偶に避隠して、或は眞面目に、或はふざけ乍ら、最も無邪氣に勉強せられ候。其の眞面目なるときは嚴然犯すべからざる壯夫にして、たわいなくふざけ出すときは、其の嚴格なる相貌は全く崩れて笑ひ興ずる様は宛然小兒の如く、田村將軍の事をも連想せられ候。時々煙草を徵集するとて、オーイ一本

呉レー、呉れないか、呉れなければドナルぞ、伊東はナー、昨日日本橋で、等と有りもせぬ事を高聲にドナルに閉口して煙草を出せば、袋の儘に取らんとする等は中々滑稽に御座候。又時々開かるゝストープ會議の時などは、牧野、毛利の二將、兩偶より出馬せられ、洒落合戦を始むる時は中々見事にて、雙方火花を散らして戦はれ、到底他より突き入り、或は仲裁を試むるが如き隙間なく、只其の戦ひ振りを傍觀否傍聽するのみに御座候。又一寸異様に感ぜらるゝは、兩將の採らるゝ畫題にして、毛利君は平常の行爲より推せば、至つて優雅なる畫題を取るべく見えて、實は先きの武士の如き、樊噲の如き、勇壯なるものを撰び、牧野君は之れに反して、平常の行爲より推して、威武的或は勇壯なる畫題を取りそうに見えて、却て菊童子や莊子の如き、優雅なるものを撰ばるゝ事に御座候。

橋爪將軍も、中々工風家にて、机に對して始終左右に御辭儀をなしつつあり候。郷里にて受けたる山田敬中氏の畫風にて、巧妙に揮灑せらる、級中第一の「テクニシアン」と推さるべく候。然るに川端「玉章」先生には甚だしく恐れられ候て、如何に熱心に揮毫しつつある時にも、若し窓外に先生の足音を聞く時は恰かも悪作戯を働きつつありし鼠の、猫に逢ひしが如くに御座候中々滑稽に候、此の將軍も中々洒落好きにて、時々戦ひを挑み候へ共、好きな比例には上手ならず、何時も敗軍の姿に候。それよりは沈黙の間、突然に切り出す榎本「省三」君の矛は却て利くべく見受けられ候。右大略申上候。(二年SM「前田千寸カ」)

○日本畫三年 本撰科合せて十四人、所謂當世風の才子を缺き、揃

ひも揃ひし變屈物の寄合、級中最も志想の豊富なるを、唯ぞと、問ひ給ふ勿れ。我等の中にはローマンチックを主義とする者などなし。唯コスメチメツクの薫床しき人一人ぞおはす、江湖藤木「正之助」君、又の名星月夜鎌倉山の君と申す。威風堂々聊か蠻氣あり、天を仰いで大笑すれば、障壁共に搖ぐ、これ、太極「渡辺忠三郎」亞米利加の百姓君なり。容貌魁偉、銃獵と講談とに有頂天なるは長峰「登良雄」君なり。滑稽百出、嘗て前坐たりしかを疑はしむるは、井上「良介」先生なり。前額廣く名月や來て見よがし的にして、鹿の後向にも似たるは玉濤小山「朝忠」君なり。一撥弦に觸るゝや梁塵爲めに落つ、日向の人、益田「珠城」君と申す、倭小漢はこれ。威ありて猛からず、神表凛々、而も無藝無能なるは、余なり。同人手を携へて諸君を待つ、餘暇新館樓上に訪ね給へ、喜んで迎へまゐらせんに。(三年光祐)

東京美術學校近事「一一八。M・三六・四・一五」

○前號掲載後に於ける職員の動靜左の如し。

一月十四日、學校長正木直彦氏を始め、教授川端玉章氏以下拾壹名、第五回内國勸業博覽會審査官を命ぜらる。其氏名は前號「第七号「芸苑彙報」の欄」に報じたるを以て畧す。

同月十五日、教授海野子之吉氏、博覽會事務局より賞牌圖按の調査を囑託せられ、同月廿二日其調査の爲大阪に出張せり。

二月十六日、第五回内國勸業博覽會出品陳列又は同會製作事業に關し、助教授黒岩倉吉、書記屋代鉞三の兩氏、大阪に出張せり。



第5回内国勸業博覧会出品
日本画予備の課程生徒成績品



第5回内国勸業博覧会出品
一縷の命 彫刻科四年生合作



依嘱製作 第5回内国勸業博覧会
楊柳観音噴水器雛型



依嘱製作 第5回内国勸業博覧会龍神噴水器
製作記念 後列左より2人目竹内久一、4人
目千頭庸哉

同月十七日、博覽會審査官たる學校長正木直彦氏は、第九部兼第十部勤務を命ぜられ、教授川端玉章、同高村光雲、同黒田清輝、同荒木寛敏、同石川光明、同海野勝珉、同久米桂一郎、同川之邊一朝、同島田佳矣、囑託合田清の諸氏は第十部勤務を命ぜられ、教授藤田文藏氏は第十部兼第九部勤務を命ぜらる。

同月二十日、嚮に英國へ留學を命ぜられたる教授下村晴三郎氏は、此日渡航の途に上らる。

同月二十三日、教授海野子之吉氏は、御用有之佛國巴里府へ出張を命ぜられたり。

同月二十四日、嚮に佛國米國へ留學を命ぜられたる助教授櫻岡三四郎氏は、留學の途に上られ、助教授沼田勇治郎氏は、依頼本官を免ぜられたり。

三月六日、本年四月よりの假入學生に課する學科の擔任を定められ、教授岡田三郎助氏は木炭畫を、助教授岡田秀氏は毛筆畫を、同黒岩倉吉氏は彫塑を擔任することとなれり。

同月七日、博覽會審査官たる教授石川光

明、同海野勝珉、同島田佳矣の三氏は、第七部兼務を命ぜられたり。
同月十日、博覽會審査官たる教授島田佳矣氏は、第六部兼務を命ぜらる。

○奨學資金の寄付 教授島田佳矣氏より、標記の如く、金百圓を本校に寄付せらる。

○蒔繪製作法 今般辻村助教の擔任にて、標題の學科を實習時間内にて教ふることとなり、漆工科及圖案科に之を課せり。

○海野沼田兩氏送別會 教授海野子之吉氏は別項にも記す如く、佛國へ派遣せらるゝ命を承け、元助教沼田一雅氏は、陶磁器象形術練習のため、農商務省より實業練習生として佛國巴里セーブル等へ差遣せられるゝにつき三月廿四日本校職員一同は兩氏を招待して、送別の宴を張れり。

○辻村松華氏の出張 同氏は久能山唐門等の修理工事指示のため、静岡縣の依頼を受け、先頃も出張せられしが、三月十四日より往復五日間を以て、再び同山へ出張せられたり。

○博覽會の本校成績出品 本校より第五回博覽會教育館への出品は、其數總計百六拾點、此價格概算金八千參百有餘圓にして、教育館表入口の右方に當る拾坪餘の一室に陳列せり 其室の位置は教育館内の西南に位し、前は東京大阪の兩高等工業學校の陳列室に面し、斜に高等師範學校、京都市立工藝學校に對し、左は文部省及同省直轄各部の陳列室に隣れり。室内の左右及正面の壁は鰻魚茶色の布にて貼りつめ、各科作品を排列す、先づ館を入りたる通路の中央に、彫刻科四年生合作の石膏製婦人半裸躰（一縷の命）の大彫像を

据へ、室の入口前の左方に、堺公園建設の龍神噴水の石膏模型を備へたり、入口は西洋建築風の裝飾を施し、之に校名の高彫金字の額を嵌む、室に入れば、中央に美術館前に設けたる楊柳觀音噴水の石膏模型あり、室内左側の壁面には、圖案科と日本畫科の作品を懸け、壁下に臺を設けて日本畫科生徒の圖案貼り込帖を置き、又飾箱貳個を並べ置きて、彫金科、鍛金科、工藝塑造教室の作品を納め、正面の壁面には西洋畫科作品及同科成績一覽の箱貳個を掲げ下に漆工科成績飾箱壹個を置き、右方の壁面には西洋畫科作品數點、彫刻科の額面數點並に本校英文一覽、歴史科講授用の筆記用紙貼込額等を懸け、其下に彫刻科、鑄金科の飾箱貳個を置き、夫れより入口に向ひ、臺を設けて、鑄金作品及彫刻の石膏製作品數點を駢列す、此他本校授業の状態を寫せる寫眞及一般の概況を知らしむるために作りし諸表を收めたる本校一覽の懸箱貳個は、入口裏面左右の壁間に掲げたり。今茲に本校各科出品の數を記せば、左の如し。

日本畫科二十四點 西洋畫科二十二點（一覽共）

彫刻科二十三點 圖按科九點（合作大圖共）

彫金科二十五點 鍛金科十二點

鑄金科二十九點 漆工科二十五點

工藝塑造室十四點

○淺草公園の噴水器 前號にも掲げたる金龍化身神像噴水器は、此頃全部の鑄造を竣じたるを以て、遠からず建設せらるべし。其場所は觀音堂前の筈なりしも、都合に依りて建設地を堂後の廣場と改めたり。本號卷首に掲げたるは其の寫眞なり。

○日比谷公園の噴水器 日比谷公園に鶴の噴水を設けんとて、ア

ク燈の裝飾と共に、本校に依頼し來りたるを以て、近日其原型製作に著手の筈なりといふ。

○本校の生徒募集 本校は例年の如く、此際各中學校卒業生の假入學を許し、四月中旬より授業を開始する筈にて、去二月末各府縣並に中學校等へ照會狀を發したり。又競争試験に依る生徒の募集は、假入學生の員數決定の上發表する筈にて、其試験は本年は少しく之を早め、六月下旬に施行するといふ。

○萬國郵便同盟創立紀念碑建設競技 今般瑞西國ベルヌ府に於て、千九百年七月開設せし萬國郵便會議の決議に基き、萬國郵便聯合創立紀念碑建造の趣を以て、左記譯文の書翰寫を添へ、逕信省より文部省を経て、右に關する設計案應募心得書を本校へ配布せられたりといふ。「長文につき省略。」

○懸賞圖案の受賞者 本校生徒中より募集したる懸賞圖案にて賞を受けたるは、左の諸氏なり。

廣島高等師範學校校旗圖案

一等賞 金四圓 圖案科二年 十二町貞吉

二等賞 金三圓 同科豫備課 永榮 定義

東京音樂學校徽章圖案

一等賞 金三圓五十錢 日本畫科豫備 鹽崎 一郎

二等賞 金二圓五十錢 西洋畫科二年 薄 拙太郎

三等賞 金一圓五十錢 同 一年 岡本 尙市

ワインリスト表紙圖案(東洋汽船會社依頼)

一等賞 金五圓 西洋畫科三年 谷 齊一

二等賞 金參圓 圖案科二年 澤田誠一郎
三等賞 金壹圓 同 一年 松川第八郎

フールド表紙圖案(同上依頼)

二等賞 金六圓 西洋畫科二年 橋口 清

三等賞 金四圓 同 三年 谷 齊一

四等賞 金三圓 圖案科二年 澤田誠一郎

五等賞 金二圓 日本畫科豫備 飯島保治郎(次)

○本校生徒の受賞 本校生徒にして、本校外の諸會に於て、圖案の賞を受けたるは、左の諸氏なりといふ。

日本圖案會懸賞繪はがき圖案

一等賞澤田誠一郎(圖按科二年) 二等賞十二町貞吉(同上)

日本圖案協會臨時懸賞中形圖案

一等賞石島古城(文本郎)(日本畫撰科二年)

日本漆工青年會懸賞烟管筒圖案

一等賞芳賀晋三(漆工科豫備之課程)

日本圖案會懸賞卷烟草包紙圖案

一等賞十二町貞吉(圖按科二年) 森垣榮(同一年) 等外特別賞澤田誠一郎(圖按科二年)

彩霞會(市田彌兵衛氏依頼) 中形浴衣圖案

四等及七等賞澤田誠一郎(圖按科二年)

京都錦文會織物圖案

八等賞澤田誠一郎(圖按科二年)

畫報社水仙模様懸賞圖案

二等賞三野雅一(圖按科豫備) 四等賞十二町貞吉(圖按科二年)

○博覽會賞牌圖案の決定 曾て本校職員生徒中より募集したる、第五回博覽會圖案は、生徒の當選圖案中に在りては、十二町貞吉氏考案の分を採用することとなりし由にて、その報酬として今般同氏は金拾貳圓を追給せられ受領したりといふ。

教室雜俎〔同〕

○鑄金科 立派な學校へ向つて、門を入る時は心持が良いが、オット之れは他の教室だ、吾々は之れを通り越して、ズーッと一番後の暗い陰氣な處へ行つて、職工の様になるのだから、ドーしても本館の生徒さん達と隔りが付き易くて困る。

だが、吾々の科で誇るべき物があるのだ。其れは、エン、ジンと、キ、ユポラだ、其れが一度唸り出す時は、其の響は天に鳴り、地に轟き、爲めに全校も震動せんばかりだ。其の火力には、サスが本館の生徒さん達も色が青くなる様だ。其の時だ、吾輩の鼻が高くなるのは、其製作は我科否東京美術學校を代表して、仙臺青葉の城趾に巍然として居るのだ、旭に輝く金の鯨は、ド、ツ、コイ昔の作、今は濱松に燦然たる金鷄も、此の科の産だよ。皆んなこんなもんだ、仕事を爲る人は眞黒になつて働いても、出来上れば其の名の表はれること斯くのごとしだ。其のかはりに、後進者の作を奪つて、自作だといつて誇つてる奴もある様だ。あなにくらしや。(寢言生)

昨年までは、大握飯の腰辨當先生も、今は研究生とシヤレ込んで、頸も飛び出すばかりの灰殻、黒き頭も白くなる程、ベツたりと付け込んだコス、メ、は、さすが日本子養のヨウロツピアン、スタイル、之れ鑄金科の花だよー伊東〔勝〕君。

是れは内幕の話したが、我が鑄金科では、花瓶と置物より外の物は作らうと思はぬ様だが吾々は他の科の人々とは違つて、卒業後飯を食ふに付、ドーしても自營せねばならぬ、其の時花瓶と置物ばかりを専門としては、トメモ飯は食へないよ。だから吾々は工藝品にせよ。美術品にせよ、萬鑄物をやる様にしては如何、工藝品でも、充分なる美術を施す事が出来る、碌々たる美術品置物を作るよりも、むしろ之れを工藝品の裝飾に用る時は、物品の品位を高尙優美にする事が出来るではないか。花瓶屋専門を廢めて萬屋となり給へ、何んでも鑄物の範圍を廣くするのが第一だ、それには色々な物を作つて、美術學校ではコー云ふ品々が出来るぞと、世間に知らしめて、吾々より供給を作り、世人を導かなければならぬに、世人の需用に教へられて初めて作る様だ。コー云ふ風では、何年立つても、鑄金科の卒業生は、貧乏と御馴染となつて居るのだ。何んでも世間と近寄らなければならぬ。天才なき者は美術家を欲する勿れ、工藝家を以て自任せよ、學校にても此の方針を採つて貰ひたい。(よろづ屋)

○漆工科 前の月報でNO生と云ふ人が、僕等の科の圓滿な事を紹介したから、今度は僕が自慢を書いて見やう。僕の科の生徒は一躰に文學志想を有つて居る様である。で僕の科には他の科の様にスト、イ、ブがないから、大概授業時間外は火鉢の周圍に三々五々集まるのである。所謂火鉢會議？。で其會議の時の話柄に上るものは、いつも、文學雜誌の批評とか文士の月旦などが其大半を占めて居る。で此會議の時は必ず討論をする。尤も此頃は一般に理屈家になつた様で、他の人が白いと云へば、否赤いと云ふ様な工合がある。是れは彼の岩村〔透〕先生の巴里の美術學生が、幾分か與つて力あるだら

うと思はれる。又生徒の中には、美文とか〔イマ〕短文とか云ふものを、或る文學雜誌に投書するものもあるさうだ。また先月から、毎月一回か二回、俳句の十句集を初めたさうだ。又圖案研究會（漆工科丈けの）の如きは、毎月圖案の課題の外に、文章をも募集して居る。又此頃は其圖案研究會の會歌を募集しやうと云ふ企もあるさうだ。此様な工合で、やつて行けば、必ず近き將來に於て、僕の科の卒業生は、かの光淋〔琳〕、是真の様に、漆工家としても、畫家としても、圖案家としても、文學家としても、成功した人物になると云ふことを、僕は固く信じて疑はないものである。（あづま）

○同科 この間は制帽改正の一件が持ち上つて如何にも足元から、鳥が立つかの様であつたが、此頃は頓と火の手が上らない様ですナ。どうなつたのですか、將た又決まつたのですか。

何しろ、どうにか早く良策を一決したいものですナ、處で僕の科の制服に就ての意見を一寸述べたいので。

一裃漆工科は、御承知の通り矢張りまだ日本風で、疊の上の仕事であつて、兎に角細かい心氣な氣長な人間のやつて居る所です。處で今の制服が、製作上に於て、どんなであるかと云ふと、先づ不適當寧ろ不便だと云ふ事です、どの様に不便なのかと云ふと、第一あぐら踞坐を搔くに最も窮窟を感じる。又どうしても、前に屈かまみ易い仕事なのだから、従て洋服だと胸が壓迫される、首が締る、腕が不自由で、肩が沮ほむと云ふ風である、其窮窟なことを云つたら、實に堪らない、それも久しくやつて居れば却て便利だと云ふ人もあるが、之れは健全な體を曲げて、一の習慣性となしたものだと思ふ、丁度越後獅子のそれと同じである。又或少し大きな製作をやつて居る時に

は、是非とも胸の處へ持つて來なければ遣り悪いと云ふ場合があり、又思はず持つて來る場合があるが、其時に釦で器物に疵を付けて大變な失策を醸す折もあつて、何うにもかうにも仕方のないことがある。するかと思へば腕の釦が思はず疵を付ける時もある。まだ申せば随分不都合なことはあるが、餘り長くなるから略することとするが、斯様に、吾々は可愛想にも、不便利な西洋の服を、通常服として着なければならぬのである。一裃洋服でなければいけないと謂ふのは體操の時ばかりではないか、それも二年級迄の事だから心棒が付きさうなものだと思ふ、然しそれは勝手なことだといふならば、體操の時には洋服を着てなすことゝして、和服の上でも洋服の上でも、自由に着て仕事をする様にして貰いたいと思ふのです。若し是れが漆工科丈けに限るとしたならば、不都合かも知らんが、彫金科なども其性質を同じくして居る。また鍛金の方も然りだ。日本畫でも、彫刻でも、圖案でも、右の方針なら大賛成であらうと思ふ。今彫刻科の造型の方で着て居る様な服装は制定かは知らないが、理髮屋宜しくと云ふ見得ではあるまいか、處で舊服の上着を再用するのが適當だと考へるのです。若し工藝科丈け不都合で他は便利だとしたならば、工藝科は工藝科、繪畫科は繪畫科、彫刻科はそれと云ふ様に、各便利な服装を制定するのも、決して不都合ではあるまいと思ふ。無論不統一とか、不整頓とか云ふ人があるかも知らんが、それは大學や高等商業や音樂學校等と比較しての考へで、本と首ツ引きの學校とは違つて、全く其性質を異にして居るのだから、同一に見做す事は出來まいかと思ふ、して其學校の内が又全く性質を異にして、日本畫や西洋畫の様に紙や布に自然を寫すとあれば、彫刻の

様に鑿と槌で、木や土を細工するのもある。鑄金の様な火事場の様な處があるかと思へば、漆工科や彫金科の如く、近眼になりさうな仕事をやる處もあつて、所謂千種萬態、各違つて居るのに、其れを一定の規に嵌めやうとするのは、藝術の學校に行はれることでなからう、制帽の事が出て居たけれども、制服の方を改正して後に遣るのが順當だと考へる。吾々は決して、學校を不秩序になさうと云ふ考へではない、衷情から實技上に便利な都合な策を獻上する迄ですから、悪しからず御考を願ひます。(をかもと〔岡本尚市〕)

○圖案科 僕の教室は、中々愉快な教室で、人數は少ないが、やる事は大きい、第一に法螺と來たら校中でも負けない方だが、其れよりは一層注目する事は、統一と云ふ事、即ち一科團樂と云ふ事が、外の科よりは進歩して居る。處で此の圖案科の親戚にあたる教室は日本畫の二年級で、互に馬が宜く合ふ、又時によると馬鹿までが――、過る二月の三日の大雪にも、手に手を引いて、隅田川に端艇漕ぎと云ふ、馬鹿に面白い美術的の快樂をした。内には西洋畫の人も居つたが、外の科の人は影も見なかつた、定めて馬鹿馬鹿しいと云ふて、家で寢て居られたらう、又笑て居た人もあつたらう、然し僕等から云はると、不活潑とか、腰拔とか云ひたい――、若し此れが不平なら宜く爾後は、隅田に舟漕ぎと出かけ給へ、然らざれば因循連の帳簿に記入するから、一寸御注意迄に。處で其當日のステキに愉快で而も美觀であつた事、二三を記すると(1)燒芋の分配(2)櫻餅の握り合ひ(3)寒さに手の振へ様(武者振ひ)(4)外套の引張ツコ(5)ぬれ鼠の歸り姿、此の五ツが最も優等の製作か(Sketch)の材料として、最も宜い、滑稽畫の参考としても、充

分此の一日は實に有益なる、又と得がたい、愉快な日であつた、尙以後は一層此等の事が、勤學の閑に盛んに實行せられたいと、腰の抜けない人に望む。(ヒゲヅラ)

○彫刻科四年 彫刻科は全躰に此欄に出ることが少ない、そこで僕も何か言ふて見やうと思ふが、どういふ事が宜いのか解らない、かまして口から放題に人眞似をすることとした。扱て何か言はうか、先づ僕等の教室に他に無いものがある、それは第一に大きい立派な鏡、是れは學校中にたつた一つのものでそんなじよそこのハ、イカラ、先生達は教室へ入ると眞先に此の鏡の前に立つ、その爲に態々來られる人もある様だ。第二には級中學で寶生流の謠曲を嗜むので、これも他に比はあるまい。(但し皆で四人)けれどもまだ未熟で黒人はだしといふ程の者はない、若しあつたにしても時節柄足袋位ははいて逃るだらう、何故つて、はだして歩けば科料に處せられるからさ。その次は此度の卒業製作で、どれもこれも作るものが女ばかりとは珍らしい、或人は、誰か男を作る者もありさうなものだ、と言ふた、どんなものが出来るか知らないが、撰び方が各得意の方面らしく、平生の趣好も思はれて面白い。此位にしてそれから各自の風采を見ると、遠藤〔忠雄〕君の刑事巡查兼探訪、最も適評。毛利〔教武〕君の新俳優、これは和服の寫眞がそれらしいから。杉本〔伝〕君の門徒坊主、これは極めて新しいので、弓術師範の本多〔利実〕先生の評がいゝ、「杉本さんは此頃何宗になりました?」といふから僕が門徒ださうですと脇からいふと、「ハ、ア成程さうでしやう、他宗では中々辛棒が出来ますまい」。弓と來たら毛利、杉本二人、四級の御大將で氣焰中々當るべからず、此事では僕

などは一言も出ない。オットはまだ僕の君子が残つて居る。これは意味深長容易に語るべからず。若しうっかり他の級の人でも来て見給へ、鋒を並べて包圍攻撃の洒落飛しときたら、雄辯を以て名ある流石の竹内友吉君も時々閉口するのでも烈しさが察しられる、これも或時は極めて眞面目である。人は僕をすますといふが、これが我輩の本性なのだ、それから、此面々の隠し藝はそれは／＼凄いなのだが、あまり書き過ぎると種が無くなるからこれ位でよさう、併し隠れたるより顯はるはなしとは成る程な、僕の如き多藝の者は一度も演らなくても、中々隅へ置けぬものだとき。(男之助)

○日本畫科一年 以前は朦朧の流儀が餘程斬新な進歩した遣方だと思つて、同人間には稍流行したやうだが、近來は形勢稍一變して所謂朦朧的流儀は有難い遣方でも何でもない、畢竟あれは自然を胡麻化するの一手段たるに過ぎずして、到底眞面目なる研究を経て起つたものでない、と、かう悪口を云ふやうに成つてからは、漸次朦朧の聲は稍輕侮の意を含むやうに成つたが、今では一般に寫生といふ語が之に替つて、何でも彼でも根底は實際の上に立てなければ可けないといふ風に成て來た 例へば一新按を畫くものがあると、第一に問ひ掛けらるゝは其れが寫生？否？である、若し寫生だといふと直ぐ不自然だの、曖昧だのと無遠慮な批評が出る云ふ有様、此が我級此頃の狀態なのである。併し結局此流行は例の朦朧とに五十歩百歩で、等しく其ド、畫風に屬する點は變らない、只其遣方が彼より眞面目の方面にある位の差であらう、此前に一度我級朦朧時代の諸名士を紹介したが、其後新に三四の名士等加はつて、茲にド、風が盛になつたのである、中にも三浦北峽「孝」君は最も人物畫に勝れて

居つて遙に先進の風がある。勝田蕉琴「良雄」君は山水よし、人物よし、花鳥も亦よしいふ筆の達者、口も中々達者であつて級中第一の議論家である。水鳥櫻波「爾保布」君の多藝なる水彩をよくし圖按をよくし、尙新派和歌の上手である。最後の尙一人教室の一隅に獨孤仙人を極め込んで、何がさて物は古色ぢやもの流石雪村は旨いもんやわいと、終日古畫を机上に展して、一幅を摸すること尙朝飯よりも早いてふ筆技家、是れ平木月村「弥一郎」君である。此外に尙紀念のため記述すべき事柄も澤山あるが追て今後の閑を見て書く事にする。(にしき「西村喜三郎カ」)

○同二年 敢て特筆大書……といふ程の事ではないが、ちよつと御披露申したいといふのは、我日本畫科二年の撰科一同が、去月廿八日を以て本科の教室内へ合併した事である。で、其理由といふのは外ではないが、御承知の通り我二年は一年の時分から、他の級よりは比較的多人數で、とても一室内には入れ切れなかつたので、是まで本科と撰科とは其教室を異にしてゐたのだ。それがため自然と其間に妙なかけ隔て……といふと角が立つが、つまりだ子、まア割合に親密といふ譯でなかつたのだ。それ故に何となく……卒直にいへば互に面白からぬ月日を送つてゐた。ところが此二年になつてからは、共に人數も減つて來たし—其他の事情もあらうが—受持の白濱「徴」先生も此間に立つて大に心配せられて、つひに斯くの次第サ。さて、そこで合併してみると、兎に角十三の机が廿二にもなつた事だから、淋しかつた教室が俄かに賑はしくなり、机もしたがツてバランスングに配列され、休憩の時は一ツのスト、ブを圍繞するといふ……萬事斯ういつた様な譯なので一家否一級

の團樂を形づくつた、まことによるこぼしい事です。

もう一ツをかしい事といふのは、これまで我日本畫科は午後まで授業があつたのを、學校の方ではどう感ずつたのか正午限りに改正した、で、時間が少なくなつたから畫を描くことも自然短かくなつた道理だけれども、事實は大に之に反して、反て成績が割合にあがる。といふのは、何分授業時間の少ないために……なまけてゐると直に十二時になるので、これまでの様にスト、ト、トにばかり噛り付いてゐられないから、眞面目に勉強するので、又欠席者もこれまでよりは少なくなつたといふのは、なんとをもしろいイヤ不思議な現象ではありませんか。

(ふるじろ「石島文太郎・古城カ」)

ソレから、今度は僕の級の道樂競べを紹介しやう、一體人は何か一の道樂を、持つて居るんだ。先づイロハ順で飯塚「辰雄」君から始めやう、此の人の道樂は、沈黙と溫和とが道樂だ、出席して居ても、居るか居ないか別らない、而し此の沈黙の間に何か考へて居るらしいが、之れは思ふに製作の考案か、漢詩の句か何かであらう。元來僕の級は頗る殺風景で、詩だの歌だのと云ふ文學的の事をやる人に乏しいが、只獨り此の人は漢詩が數年來の御馴染みだ、溫和しくつて運動もしいかと思ふと、意外に擊劍をやり、柔道も時々やる、併し器械體操と銃器の體操は大ざらい、直線の單調なるをきらつて曲線の美を好むの主意に出でるのか、包みを左の腋に抱へ、兩手をゾボンの前衣囊に入れ俯むき減に頭を下げ、時々下げた儘の頭を左右に轉じて、何か見乍ら、五六歩は斜右に、又四五歩は斜左に、始終くの字形に歩いて、減多に直線に歩ゆんだ事は無く、時々は街頭に不動の姿勢をして、電信柱と鉢合せをして、制服の袖を裂

いたり、車馬に突き當つて失敬したりするのは、之れ實に池澤「義雄」君の獨特の道樂だ、失敬、曲線の美や變化等を藝術の上のみでなく、自身も試みやうとは實に忠なものだ、失敬、他の者は皆喋いで居る時に、至つて眞面目で、それを利用して種々に、からかはれて、眞面目にそれを受け、終には棒切れを持つて牧野「左武」君を追掛け回はすのも、亦池澤君獨特の道樂である。先生此の頃は團藝に熱心で、仲間の宿をそちこちと歩いては、松尾「一造」君一番失敬しやうぢやないか、橋瓜〔瓜〕「成一郎」君一番失敬といふ様な譯で過日は小沼「直」君と大に失敬して、小沼君が四勝、池澤君が三勝で、池澤君が逆に一番失敬したさうだ、氣焰も又道樂の一つだ。一つ先づ君の寓を訪ふて見玉へ、たゞき様によつては中々鳴るから、やア失敬失敬、此の失敬も又君の道樂の一？」橋瓜君の道樂は中々多い、先づ琵琶歌は去年の十月頃以來、三年の益田「珠城」君から大に教はつて居るが中々勉強なもので、歌集を常に懐にして居て、暇さへ有れば、「春日野に」をやつて居る。所が僕は未だ氣が付かんが、歌ふ時には甚だ鼻の孔が大きくなると云ふ事で、先づ五六錢位ひの林檎位は確かにはいると云ふ評判、若しソレ君の義太夫と來たら巧いもので一口始めると、滿場冷評湧くが如しである。此の頃は團藝もやる、同宿なる三年の佐治「友八」君や、又小沼君、松尾君等は其の敵手と求る所だ、大食は又其の獨特であらう曾て郊外寫生に行つた時の如き、腹も空いて居たであらうが、品川の蕎麥屋〔蕎〕では、確かに人の二倍は平らげた、又パンを食ふ時の速やさ加減は減相なもので、十個や十五個は一トロ口だ、何故斯く早いかと思ふてると、之れは食ふのでは無く、飲むのである、古來茶を飲む者は多く

聞いたが、パンを飲むのは今始めて聞いた。忽として来れば不動盤石の如く、漂として去れば、見えざる事燕の如く、一言一行少しの意地なるものなく、そよよ、よかつべーよ、かまうもんか、にて萬事を處理して少しの邪氣もなく頗る出世間的なるは谷口〔善四郎〕君だ。此の御殿、元來碁、將棋、かるたの如き手先きの勝負事には大反對にて、正月などにかかるた會に招^{〔か〕}がれても、先づ祝盃を傾むけて、主意なるかるたには目も呉れず、飲んで酔ひ倒れて了ふと云ふ御方である。本所にベストが流行る、面白い、淡路町に發生した、面白い、嘗て品川の友人尾崎君を訪ふた。尾崎君は此の珍客に入浴を勧めたので、先生大急ぎで馳け出した、主人公大に驚いて、長屋の爺イが這入つて居るから、モ少し待てと云つても先生肯げばこそ、かまうもんかと、一時間餘も長湯して居るので、家の者は待ち兼ねて、行つて見ると、先生トント平氣な者で其の老人を捉へて、放談高笑故舊の如しき。暫くして使ひ減らした石鹼を持って出て来て、大威張りで曰くさ、舶來石鹼等を用ひる時はないから、こんな時に使はないと損だと思つて大に使つてやつた、あゝ餘りこすつて顔の皮が薄くなつたとやつてのけた、大陸的の氣象を以て擊劍の他に何の道樂もない。擊劍は中々、奇麗な手を遣ふ、ンダナー、ソーゲー」稽古着を肩に引つ掛けて、小足に教場へはいつて来て、オイ己れは此頃馬鹿に柔道が巧者になつたぞ、どれ位上手になつたつて、マー道場に來て見りや分るサ、時々人は人を倒す様になつたもの。ナニ己れを自慢すると云ふけれ共、ソリヤ、うそだ、皆なは、有もせん事を云つて人を素破抜くけれ共、僕はそんな事はせん、僕の云ふのは本統の事だ、だから自分の事もうそは云はん、有りの儘

を云ふのだ。之れは松尾君の直言なる事を自ら表白する、更に無邪氣な小兒らしい言葉である。柔道と角力と、圍碁と、運動會競争とは此の君の道樂である。競技は、其の國に居られる時分、金澤工藝學校の第一チャンで有つたそうで、角力は田舎角力の大關で有つた。之れは君が本統の事を云つたのだ、又角力も運動會競技も、金澤のみでは無い、本校の大關で、第一チャンで有らう、圍碁も級中の大關らしいが、月報で素破抜かれるからいやだとの事で、誰れにも實際の事を云はなかつたさうだ。

(Y M 生)

○同四年 四年はなまけると云ふ、なる程、教室がにぎやかでないのを見ると、なまけ無いとは言へない、家で製作の下圖を付けずに學校で付けると云ふ、學校で付けるも家で付けるも同じ事で、寧ろ學校では互に相談するといふ便利が有るでは無いかと言はれる、然し懇篤な注意にそむき、出席簿上に、シンシンと恰も雁行のその如き者を記されても、未だ過半の欠席者の有る所を見ると、即ち原因す可き所がある。去年十一月卒業製作の命令が下つてから誰も他で想像する様に遊んで居る者は一人もない、否命令の下らぬ以前から、それ／＼考に考へては居つた、想へば吾人は青雲の志を懷いて、始めて本校に入學した當時の元氣は、明治美術を大成せん使命を帯びたかの如くで、土豚の天上する勢もよも之には及ぶまじき程であつて、星霜茲に五年を経たが、果して此覺悟が貫通されて居つたや否やは知らぬ、然りと雖も、吾人の目的に向つて五年の修養を積んだのは確かである。されば誰も其養つた想を如何に現はさうかと思ふて、一通りの苦心では無いのである。先づ畫題の選擇で、夜靜なる時、目を閉ぢて、默念の三昧に入ると、迷ふは／＼は、之が

爲曉に徹する事も少なくない、沈黙^{〔考〕}行想を練り意をこらし、十數日の後始めて確定してからが、所謂欠席の原因となる。それから材料の採集で、博物館、動物園、圖書館、文庫、或は有識家訪問、其他山水描きは勝地へ寫生に出かけるなど、愆として、誰も自分の繪を出來得る限り完全に仕上げたいと思ふから、夫はそれは想像以外の勉強をする。材料も一通り集まれば、次は人物の寫生であるが、學校の費用の過半は之にあてるのを見ても、其努めて居る事が知れる。又今様を描く人は此外に相應の寫眞を集めて居るが、只一概になまけて居ると見られては割りに合はん様である、されば今製作の畫題と苦心の一斑を紹介しやう。葛^{〔揆一郎〕}君、氏は題を或る小説から取つたとかで、貴婦人に手術を施す所で、第一に手術の方法は、氏の知己の醫學士に教を乞ふた由で、又手術室は東洋第一とか云ふ或病院の實地を寫生したのであるが、觀覽の嚴なるより、氏は醫士のつもりで内々寫生に通ふた由で、其外赤十字社や、府下の有名な手術室は、大躰見廻つて、手術の有様を見た由だか、又手術者の服と看護婦の服装は自ら新調したが、茲に面白いのは畫中の主人公たる可き手術主任のモデルに或醫士の進んで成つた事である。さればメスの持ち方や、ガーゼのあつかい方は、之が爲め寫生上神に入つたとかである。又異彩を放つたのは、其夫人をして圖中の被手術者たる貴婦人に擬した事であるが、其夫人の果して圖中の伯爵夫人たるに適して居りしや……、又いつか解剖のある日であつたが、氏は殆んど願も没せん計りのハイカラを付けて來た、何の爲と別に問ひも爲なかつたが、正午の休みの折、モデルを適當の位置に立たして置いて寫眞を各方面から撮つたので、ハイカラは主任醫學

士たる理由で有つたのだ、然しハイカラが、直ちに醫學士の價值があるなれば、之を服用したなれば萬病一切の妙藥になるかも知れぬ。胃病で、弱つて居る西洋畫のチエリー、コークスに教へてやりたい物だ。又其の時、助手に爲つた先生は、例の貧民同盟の主張者、某々君の二人であつた、其時寫眞屋の小僧が云ふのに、あれでも金を出して雇つたモデルなんですか？
(永^{〔永倉〕}江邸^{〔徳〕})

東京美術學校近事〔一一九。M・三六・五・一五〕

○前號掲載後に於ける職員の動靜左の如し。

三月三十日、助教津田信夫氏は、日比谷公園噴水器並にアーク燈の造型及鑄造主任を命ぜらる。

同月同日、囑託上原六四郎氏は、正五位(特旨)に敘せらる。

同月三十一日、本校彫刻科卒業生水谷鐵也氏は、本校雇(彫刻科助手)を命ぜらる。

四月十日、教授川之邊一朝氏は從六位に、同大澤三之助、同岡田三郎助の兩氏は各正七位に、教授下村晴三郎、同寺崎廣業、同白濱徹の三氏は各從七位に敘せられたり。

同月十八日、教授海野子之吉(美盛)氏は、元本校助教沼田勇次郎(一雅)氏と共に、佛國渡航の途に上られたり。

○假入學生 本校本年の假入學生は昨年よりも多く、目下總計人員六十七人に達し、此内師範學校卒業生二人、公立中學校卒業生三十九人、私立中學校卒業生二十人、技藝學校卒業生六人にして、四月十七日より授業を開始せり。

○生徒募集 前號にも記載する所ありしが、競争試験によるもの

は、今年より本校にては専門學校令によりて實技のみ試験し、其試験は多分六月二十二日頃より施行すべしと。

○本校の展覽會 昨年之を開きしが、本年は校務の都合によりて、見合すといふ。

○海野沼田兩氏の佛國渡航 前號にも記したる本校教授海野美盛、農商務省實業練習生沼田一雅の兩氏は、彫金撰科卒業生寛定次、彫刻撰科卒業生前島交吉の兩氏と共に、四月十八日午前九時新橋を發し、横濱より常陸丸に便乗して、佛國渡航の途に上られたり。

○櫻岡三四郎氏の着米 曾て米國へ渡航したる同氏は、三月廿五日海路無事、米國紐育府へ到着したるよしにて、先般禮狀を本校へ送り越せり。猶同氏は當分紐育西六十八町七十一番デラニー方に止宿するといふ。

教室雜俎〔同〕

○西洋畫科 僕の教室は、最も音樂學校に接近して居るので、毎日此美音を耳にしながら、筆を取つて居るなどは、頗る愉快ではないか。全く愉快であるだけに、折節浮かされて、ストーブの火套を叩いて、合奏を始める處から、先生方に小言を頂戴して、始めて氣が付く事もある。

斯う言ふ愉快な室であるから、變つた人物ばかり否動物ばかり寄集つて、一つの動物園をなして居る、併し此れは、隣地が動物園だから、其れに競争しやうと言ふ意氣込から、集つた譯ではないが、見れば見る顔が奇妙な物ばかりだから、同氣相求むと言つた様な、デッサンの崩れた者は、自然と寄つて來るのである。寄て來た結果が

即ち動物園を作つたので穴熊も居れば狸も居る。家鴨、鼠、鯰、猿、其外海賊、熊襲、越後獅子、博士、十二階、ガランズ大和尚、役者、未だ／＼數へ立てれば餘程あるが、此れでも皆親の腹から産まれたので、香具師の手に渡るのが道順であるが運善く逃れて此處に來たのである。其處に來ると僕などは、一度華族様に養子に所望された程あつて、人間に近い方所か美男子である。此美男子何故養子に行かなかつたと言へば、身元を調べられて。畫師と言ふ事が知れたので、畫師は餓死だから厭やだと言ふので、遂に破談になつた。だから見給へ僕の好男子なる事は、むく鳥と呼ばれて居るので分らう。斯様に變つて居つても、自分の顔には銘々自惚を持つて居るので、モデルの醜いのも來ると、皆な眉に皺寄せて。此んな人間になつて居ない者がかけるもんか、など言つて、何時の間にか、カルトンが隣室へ轉居すると言ふ有様である、尤も中にはモデルに氣の毒だと言ふ心持から、澁々遣つて居るものがあるが、其數は至つて少ないので、モデルは力無ささうに立つて居る。其れに引替て隣室の方は、ストーブまでが馬鹿に力むで、畫臺は拔道もない位建てられて居る。或者は腰掛を二重して、高い山から谷底見ればと言ふ見得でやつたり、又或者は西行の富士見然としたものもある。何しろ奇物が眞面目で遣る時を見たら、如何なる豪傑でも臆氣が付く、其せいか時々モデルが途中で來ないこともある。

かう大勢込合になると、屹度休み時間にはパン投げが始まる、麵麩投と言へば、麵麩を小さく指先で捻ねつて、頸や顔をねらつて投げるので、命中すると恰で定遠でも沈めた氣で、雀躍して喜んでいる。だから見給へ此れに熱心な者は、空氣銃で何日も得をして歸るでは

ないか、僕は思ふに此の麵麩投は、畫家の遊の最も自然に近づいた者ではないかと考へる、何故なれば、佛蘭西の方でも、矢張此れをやると見へて、其證據には繪かきのことをパンホルと言つて居るので分る（三年むく鳥「青木繁らのクラス」）

○日本畫科一年 どうせ繪師になる程のもの由來何處かが變はつてゐる、五躰が揃つてゐれば智恵が足らぬとか、愛嬌者には間の抜けたところもある譯で、そこが抑も藝術家たるの天分、こういへば御多分には洩れねど、お國訛りの卷舌に、覺えない英語交りの氣焰萬丈、畫師はパイターと云ふなりとて、愛嬌たつぶりの月村君、はや東都に寄寓してから一年近き其間雨が降つても雪が凍つても、一日欠かさず上野に通學して居ながら、西郷の銅像とやら何處にあるのかいとの質問に、一同哄と噴き出したのも無理はない、それも其筈日がな一日模寫の大勉強は、其鼻糞をとつて根氣の藥にでもした程であるが、此度の歸省には合李一杯の土産があるとして大喜びの罪なし草

罪がないといへば今一人の徳哉君は話上手の男ぶり、朝と歸りは門衛所で立話をして、さて何の用ありとも見えざれども、短くて半時間長い時は半日をも喋舌り費すといふ、それで出席簿をごまかさうといふ野心あるでもなく、極く話しよい所が此人の徳にて、學校では庶務會計の御役所より、下は門衛、小使、經師屋、もでる婆、外は紫玉會の下足番迄、顔の賣れざる所なく、ちやといつて別段交際の弘いのを自慢するやうな人ではない、平常は極く溫和しく、悠揚として迫らざる且臨畫の名人とも云はれて居る。兎に角級中の變り者云ひ換へれば眞の藝術家らしい人間は以上の兩君である事が分

る（にしき）

○同二年 大荒目の鎧着て八人張の弓を持ち十八束の矢を負ふて烟眼を光らせ、鎌田正家を従へて陳頭に進んだならば、いかに目覺ましき働らき「をぢ」の首の三つや四つは何でも無からうと思はるゝが、あはれ生れ時が間違つた、八百年後くれたので、大荒目も矢弓刀劍も着けられず、刀を筆に換へて本校の今爲朝となつたのは誰あらう、常陸笠間の住人牧野對山「左武」君其人である、其の堂々たる威風勇壯なる言動、確かに今爲朝である、そこで其の爲朝公の御道樂と來ては、琵琶歌、茶道滑稽、眞面目之れである、其の他の遊戯は一向振り向き玉はず、歌がるた等やる奴はたゞき殺して仕舞へ……其の琵琶歌と來たら熱心なもので、去年九月以來、歌集を懐にして暇さへあれば「哀れなるかなをかちんは……」若し午頃になつて學士會院の裏手なる林中で、時ならぬ傲嘯、動物園の象と争ふ者あるを聞く時は、即ち今爲朝君の琵琶歌である。諸君、動物園の象が脱鎖したと思ひ玉ふな。滑稽と眞面目とは合せて公の道樂である、稽滑なる人が眞面目とは聊か妙に聞えるが之れは實際公が寓に居玉ふ時を見玉へ、其の寓の家人や何かに對してしようだんの一口も利いたら、それこそ太陽西より出る様になるだらう、而し門外一步を出づれば、滑稽百出奇想天外より落ちるから、去年十二月の末つ方、同級前田「千寸」君と共に品川なる友人某氏を訪ふた、所が其の室に入るや否や座に着かぬ中から、ぼんを借せと云ふので、友人は變な事を云ふ奴だと思ふて、けげんな顔をして居る所へ小間使ひが座布團を運んで來たから、爲朝公眞面目腐つてドーか、盆をと云ふので、小間使ひは笑ひ乍らぼんを與へた、すると先生達二人

で風呂敷を開いて、二個の紙包みに立派な水引きを掛けたのを載せて出した、見ると麗々と一つには御歳暮牧野、今一つには同前田、と書いたのて此生達の平常を知れる友人某は驚いて、きよろしくして居たが、やがて氣付いて、即座に紙包みを開いた。すると牧野と書いたのには人造豆二錢袋で、前田と書いたのには古新聞紙製の三角袋に南京豆五六個入つて居たので、主客共に抱腹絶倒したさうだ。それから笑ひを止めて曰くさ、度々来て御世話に計り成つて居るのに、何時でも無手で来ては餘りひどいから、輕少乍ら御歳暮に之れを持つて来た、と、後からの談し、此の品は途中で考へ出して二人相談の上、品川町で品と半紙と水引を買つて包んで行つたのださうだ。君目下課題艶美の美人を畫いて居る、所で或る時自分の唇邊を美人の顔に當て、連りに雷の如き「いびき」をして居るので、某氏其の故を問ふたら、即ち曰く、此の畫に己れの魂を入れるのだ……

次ぎはY M生の番である、君は級中で第一倭小漢であるが、而し其の言動は甚だ其の軀軀につり合はない、其のイタヅラ、其の大食、其の悪口、其の「あばれ」方、何れから見ても一人前以上に居る。そこで今僕がY M君の道樂を書き立てやう、君の道樂としては、「ポート」柔道の他に何もない、其の他の一切の遊戯には我關せず焉である。而し悪口、大食、「いたづら」も又道樂の一つかも知れない。凡そ舟と來たら大好きで今迄「ポート」の練習等に行つた時、君の顔の見えなかつた事は一度もない。而しそれは故郷が海國で小供の時から習慣だから仕方が無からう。其の故郷は高知で小學時代から高知市に育つて、海の好きな事と來たら「かつば」も三舍を

避ける位で、太平洋の鯨や鰹は、ひどく人間の子に似た「かつば」が來たわいと訝つて居た程で、初めて東京に來た時は、故國の習慣で黒い上着に紺の袴、紺の帯でやつて來た、所が其の着物よりも袴よりも、其の顔色と來たら一層黒くて、白い所は眼玉計りであつたので、今の三年級の渡邊大極「忠三郎」君が、烏が來たと云つて、其の名を呼ばずに烏と呼んださうだ。成る程それでは「かつば」も三舍を避けるだらう、而し先生の舟好きは中々一通りや二通りでない。今年二月二日の雪中にも勿論行つたがまだ甚だしきは一人でも雪中に行くさうだ。飛雪紛々として世は銀世界、枯れた樹には一面に皚々たる花を咲かせた時、只一人で江戸川の小舟に棹さして、狂氣じみた船頭をやつて居るのも度々である。畢竟先生の小舟と來たら、供が有つても無くつても、雪が降つても雨が降つても關はない、江戸川といへばオ、それ／＼、江戸川の小舟で君の一つ話がある。或る冬雪の降つた日、先生學校から歸つて未だ室にも入らぬ内に、靴を下駄に換へて例の江戸川に行つて、凡そ二三時間も乗り回はして楮船屋に歸つて舟賃を聞いたら舟屋の主婦が、ナアニいくらでも宜しい、一錢でも五厘でもあなたの思召で、と云ふので其の安價なるに驚いて、それはいかん馬鹿に安いきん悪リ、なんぼいかそつちから云ふて呉れ、と云ふと主婦は、之れが花時ならそうは行かないが雪の花の咲いてる間は一厘の舟賃も的にしないからいくらでも可い、と云ふので白銅貨一個を出して、そんなら是れを置いちよくから、これから後何度も何度も借しとうせ、と云ふので、其れから後船賃ゼロで十回餘りも乗つたさうだ。今年の春花時には、之れは無賃では無かつたらうが矢張り多くの小舟の中を繰つ

て行く中、手練れの船頭さんだから正か、つんのめつてゝはあるまいが、羽織袴御着用の盛河の中へ眞逆様に泳ぎ込んで、兩岸の觀客の餘興に供したさうだ、それから一つ先生獨特世界の智者も嘗て知ら無い道樂が有る。それは、先生元來年が年中黒地紋付（菊水）の羽織を着て、一度も別のを着た事が無い、家に居ても外に出て、臥ても起きて、同じ羽織だ、而しそんなに詰め切り着て居るのに、何時も奇麗に紋所が新らしい、から先生馬鹿に澤山同じ様な羽織を持つて居るわい、僕も一枚もraitたいものだと思つて良く見ると、こはそも如何に、其の羽織は何時も一枚で、紋所が汚れたら、胡粉を以て書き起し、周圍には藍墨を以て色揚げして來るのであつた、此れは恐らくは君の獨特であらう。西郷南洲は十年戦争の時、一等こわい者は赤帽と雨だ、と云ふたさうだが、此の先生も又雨が一番こわいさうだ、何故かと云ふと、雨が降ると、傘が無いから、折角かいた紋が流れるからと云ふのである。躰の小さいくせに、其の大食と來たら、級中の巨人牧野君でも、パンを吞むてふ橋爪（成一郎）君でも恐らくは及ぶまい、此の君と牧野君と谷口（善四郎）君と此の三人を小石川三人組と云ふ、それは小石川傳通院の邊、僅か二三丁の間に此の三人が巢を構へて、野猪になつたり、野狐になつたり、狸になつたり、マミになつたり、又猫になつたり、總べて三人で化けて居るから斯く云ふのである。（Y M 生）

同三年 いつも教室雜俎には御無沙汰勝で、何とも申譯が御座らぬ、今月も又試験前の事として御歴々の方が皆多忙で、筆を取らるゝ隙がない様だから、我輩が代はりて、一つ出鱈目の口を叩いて見やう。先回の雜俎で級中の人物月旦を、光祐君が簡単に紹介せられたが、

猶書き遺された分を申せば、ざつと下の如しである。そこで他級の御方は御存知ないだらうが、我級は變屈物の御揃ひなれど、仲間では兄弟もたゞならぬ程睦ましい、が各自の性質と來たら、夫れは夫れは色々に異りて居る、毎日つきあふ内には面白きこと、可笑しき逸話なども出來てくる。何でも身に泌む様な、皮肉の惡口を言はねば、氣がすまぬと云ふたちが、即ち我級擧りての特色である。是と云ふのも松岡（輝夫・映丘）さんと申す皮肉屋さんがあるせいかも知れぬ、上行へば下是に倣ふて、下々の我輩迄も此頃はどうか惡口の眞似が出来る様になつた。松岡君の皮肉と來た日には、凡そ常識のある人は迎も只では居られない。我等の様な正直者は君に冷かされて、殆んど泣き出し度くなつた事が、幾度あつたかは知れはしない、だから一生懸命になつて、新案などを畫いて居る時に、此人がニツとやつて來ると、モー駄目、覺えず悚然として心氣不動、忽ち魂は消え腕は戦き、筆は其まゝ行き止り、口は顛へて物が言へなくなると云ふ始末で、實に大した魔力だ桑原々々。されど惡口が誠に上手なので、時とするとは是が反て藥になる様なことがある。夫れはさて置き兎に角此人は日本畫科では、成功に近きハイカラの一人で、我級の立物否な校中の大立物で、其博識なる事には皆人の、等しく敬服する所である。先達のの艶美の畫題などは、頗る御得意の筆を揮はれた様であつた。艶美と云へばこそ思ひ出すが、彼彌生坂の方は四月此方、大に氣を落して居らつしやるげな。高木の風で人物が高い丈け夫れ丈け、言い度い事も僅かはその計りでは盡きないが、一度此人に睨まるゝが最後だから……極音無くして直なる人とはゆめ思ひ給ふな、川面（義雄・冬山）君を、此人も又皮肉が

持て生れた、大の好物で松岡君のとはチトやり方が違ふ、夫は先づ初めはに柔かに出で、敵の急所を抉ると云ふ寸法だ。好んで黄緑青を使ふのと、雛鶏を畫くのが御得意で、御なじみの圍碁も近頃は、御上達で佐治「友八」君の好敵手だ相だ。此人の隱藝は船遊びの時でなくては、減多に出ないッて！。次いで級中第一のハイカラ藤木「正之助」さんの順だが、自惚れより割り出したる。其氣取りたる步調で、嚴かめしくドアーを排して教場に入り来るや、馥郁たる香氣は紛々として、無粹極まる我等の心神まで、爽やかならしむるの、效能が確かにある、聊か爰に感謝の意を表して置く。先生此頃花鳥かきを自廢して、唐美人へむきになつて居らる、艷美の唐美人などは奇麗で、此人の近年稀なる大傑作ちやつた、彩色の奇麗なるは此人の特色なるが、眼鏡の御蔭かも……。夙に大言壯語を以て鳴るのは、亞米利加の大極「渡辺忠三郎」様だが、前の寫生室の棚に備へてあつた、法螺貝なんかは、いつの間にかどこにか、遁げて行ツちまつた。兎に角口で言ふ丈は腕も充分きくからえらい、先づ級中唯一のハイカラ繪かきだ。此人は甚麼云ふ譯か、他級の御方へ頗る的、受けが宜くない様だ、恁麼原因のあるかは知らぬが、君が大言壯語と磊落と理屈ッぼいのに氣を呑まれて、肛の穴の小さい人は感情でも害したのであらうが、是は所謂食はず厭ひと云ふもので、全く誤解されて居るのは氣の毒の至りだ、實際深く立ち入りて、感情など云ふ小諄き事は抜きにして、交際して見給へ、誠に愉快な人、而かも深切でしをらしい所もある、夫は吉田屋の正七さん達を我子の様に、可愛がつてやるのを見て、分かるではないか。一言敢て同人の爲めに辯解して置くのである。一番正直で人柄の宜

いのは、田端村から御通ひになる、護城惠満子さんである、我は此頃知つたが護城はモリキと讀んださうだ。常に溫顔を以て人に接し、未だ嘗て怒つたことのないと云ふ、殊勝な御方だ、是も御行の功だと思へば、さても有難や。昨年下半年に我が領土内へ、移民せられた人で、志和君と申す方がある、昨今の暢氣で疲（志和）が延びて、長ふ（南合）なつたので、相變らず暢氣で御目出度う。佐治君は御手の内の山水かきを、廢業する勇氣もまさか無いだらうが、甚麼したものが此頃になつて、突然今様に骨を折られて居る。至つて着實で眞面目だが、隱藝の多いことには、豈夫れ驚かざるを得んやである、其數は迎ても一や二では濟まないから、見度い人は根津須賀館樓上を訪ひ給へ、碁でも、琵琶歌でも、詩吟でも、追分でも、松前でも、都々逸でも、何でもかでも御座れだ。蝸牛の角の様に、出たり引き込んだりするのには、深川の親父小山「朝忠」君だ、久しく顔を出さないが、學校に來ることを、忘れて居るんぢや、なにか知らんて。吉田通れば二階から招く、神田の二階から、ッヒ先日引越しになつたが、試験も早や半ばなるのに、減切り頭も出さないと云ふのは、えらい度胸の据つたものだ、多分女子大學校にて、轉校さるゝ、積りだらうと云ふ噂が、取々である、と申す我は未だ髻なき弱冠なれど、熊襲三百代の後裔なる閩都生失敬。

東京美術學校近事「一一〇。M・三六・七・五」

○前號掲載後に於ける職員の動靜左の如し。
五月五日、教授白濱徹、囑託上原六四郎の兩氏は、文部省より明治

三十六年開設の師範學校中學校高等女學校教員夏季講習會講師を囑託せらる。

同月十八日、教授竹内久一、囑託關係之助、助教羽田禎之進、書記野田義守の四氏、生徒修學旅行に付、京都より大阪奈良地方へ出張せらる。

六月一日、教授白濱徵氏は、教員檢定委員會臨時委員仰付けらる。

同月同日より、教授大澤三之助氏は近衛歩兵第一聯隊へ、助教授石井吉次郎氏は近衛歩兵第二聯隊へ、何れも三週間勤務演習のため、召集せられたり。

○本校夏季講習會開設の計畫 文部省にては、例年の通學科に關する夏季講習會を開き、其内の圖書教授法の教場に充つるため、本校を使用するにつき、本校に於ては教授岡田三郎助氏を講師として、別に木炭畫鉛筆畫の實習講習會を七月廿四五日頃より凡三週間本校内に開き、文部省の夏季講習會員中の有志者と、本校卒業生若くは在地方學校教員有志者の研究に資せんとして、目下開設の内議あるやに聞く。

○留學生白井保次郎氏の伊太利旅行、佛國に留學中の同氏は、文部省の許可を得て、本年二月六日巴里を發し、三月十一日まで、伊太利内地を旅行して、同國の彫刻に就き研究したりと云ふ。

○留學生和田英作氏の歸朝期 同氏は愈々其留學の期滿したるを以て、五月十七日佛國を發し、歸朝の途に就かれし筈なりといふ。

○生徒の修學旅行 今回大阪に開かれし第五回内國勤業博覽會觀覽を兼ね、奈良京都に於ける古社寺の寶物等觀覽の爲め、各科生徒の修學旅行を催すことは、昨年來計畫せし所にして、愈々去五月十八

日午前十時卅分新橋發の氣車に乘じ、竹内教授、關教員、羽田助教、野田書記付添ひ、京阪に向ひて出發し、六月二日一同歸京せり。此旅行中奈良に於ては、卒業生新納忠之介、中島袈裟彦、野口藤三郎の三氏、京都にありては宇治平等院國寶修繕工事監督の任に當れる、卒業生大槻才吉氏等、一行のために大に便宜を與へられしといふ。

○アリヴェー氏の胸像懸賞競技 今般故第一高等學校の御雇外國教師なりし佛國人なる同氏の胸像を製作するにつき、發起人より正木本校長に依頼ありたるを以て、今回左の如く、廣告を配布せられたり。

一 競技は甲乙二種に分ちて審査す。

甲 寫真に依り製作したる自然大頭部。

乙 胸像及石臺全體の五分の一雛形（紀念像全長八尺五寸、石臺の用材は花崗石（諸入費百五十圓の見込）

一 甲は酷肖を取り、乙は意匠を採る。

一 入技者は甲乙何れも粘土、油土、石膏の中を以て競技に應ずべし。

一 甲乙共七月三十一日迄に、東京美術學校庶務掛に差出すべし。

一 審査の結果左の通授賞すべし。

甲 一等當選の人に胸像の原型製作を依託し金百二十圓を贈與すべし
△二等賞金拾圓 △三等賞金五圓

乙 一等賞金拾五圓 △二等賞金拾圓

一 寫真は東京美術學校庶務掛に備付けあるに依り、入技志望者は借覽することを得べし。

一寫眞は故人の紀念品なるに依り、借覽中汚損せざる様、丁寧に取り扱はるべし。

○辻村「延太郎」助教授の久能山出張 同氏は嚮に本校の許可を得て、久能山修繕工事設計監督として、兩三回出張せられしが、今般更に同山の依頼を受け、本校の許可を得て、漆工部修繕實地監督のため、五月二十七日より當分同山へ滞留の見込にて出張せられたり。

○千頭「庸哉」助教授の入營 同氏は七月一日より三週間、勤務演習として召集せられ、赤阪の第一聯隊へ入營せらるゝ筈なり。

教室雜俎〔同〕

○日本畫科四年 吾々は今母校を辭せんとする時にあたつて、聊か我が級の爲に氣焰を吐いて置土産と爲やう。一體我が級は、入學以來極めて靜穩に極めて實際的である。故に學校からも殆んど忘れられる程他目には、平凡とも無能とも見ゆるのは、亦止むを得ないのである。然し其れは見る人の隨意として、扱て其實質を紹介すれば、第一團結に富んで居る事であつて、本選科共入學以來、級の中心に少しも變動が無いのが其原因でも有らう、特に選科の如きは初期以來、其席順にさへ甲乙無くして、進んで來て居る故、同級の人は孰も親友（江邨「永倉茂」曰、僕は鬼の子と親友に非ず）として、少しも其間に隔意は無い、互に大言漫罵、頗る物騒に見ゆれど、然も或る一事に當つては極めて親切に自己の力を盡して惜まざるの點に至つては、實に我級の特徴として誇る可き處である。夫れから次ぎは、極めて無頓着な事で、前號にも江邨氏が記事中に貧民同盟云々

の語が見へたが、實はあれは小生の有難く拜受した異名であるが、然し江邨君御自身も自作の銀泥の紋付で、恰も古物保存會の陳列品に有りさうな三ツ紋の羽織と、入學以來一個で間に合せたかの如く古帽子を蒙つて居る有様は、とても當世才子を以て自任して居る御方とは、ちと受取りにくいが、然し之に向つての言ひ譯は、非常に天平美術に心酔の結果と云つて居るが、まさか古い帽子が天平を代表して居る譯でもあるまい、先づ江邨君のは入學中に買ったとして稻阜、「長谷川」綠邦、腹卷（勝太郎）、否數へれば殆んど全株、皆十八世紀式である。殊に公洲（中島重丸）氏の如きは、氏が二十七年中學入學當時買ったばかりで、自身は捨て難き想ひなど云つて居るが、餘程消毒でも施して捨てずば、ベスト（黒色）を意味す）が発生するか知れやせん、畢竟「ブラツク中島」の異名も之から起つたのであらう、又或る人は上下の照應を得んが爲よりだと云ふが下とは茶皮の靴が恰も茶褐色に變じて居るからでも有らう、又氏は其帽が古いのみでなく、平生の袴も頗る古いので、聞けば、氏の父君が未だ小倉で書生をして居た時分の物の由であれば、少なくとも二十年位は経過して居る者であらう、相傳された袴も二代に歴史して居るから、氏に傳へられてからは餘り古くないとして、大光氏の正服に至つては、誰も眞として信じられぬ程である。それは氏が明治十七年中學三年の折新調したとかで、氏自らは、少し形が古式なのと少し色が變つた計りと云つて居るが、誠に三千年もたつた日本の歴史に比ぶれば、十年や二十年は、ほんの少しの事である。此外に使長と見ちがへられたと云ふ人の二重廻や、靜音氏の正服に付いて云ひたいのであるが、餘り天機をもらす恐れがあるから此位に

致しましやう。(選科龍崖〔伊藤繁延〕)

卒業製作に付ての記事は、小生多忙なると時機を失せるやの感あり候間、續稿は見合せ申候(永江邨)

東京美術學校近事〔二一〕。M・三六・九・三〇〕

○前號掲載後に於ける職員の動靜左の如し。

六月十五日、助教河邊正夫氏は、學術研究のため、京都大阪の二府、石川富山の二縣へ出張を命ぜらる。

七月十四日、助教辻村延太郎氏は、京都大阪の二府、和歌山石川富山の三縣へ、學術研究のため出張を命ぜらる。

同月廿一日、書記屋代鉞三氏は、第五回博覽會用務のため、大阪市へ出張を命ぜらる。

同月廿二日、學校長正木直彦氏は、臨時博覽會評議委員仰せ付けられたり。

同月三十日、教授白濱徵氏は、圖書研究のため滿三年間米國佛國獨國へ留學を命ぜらる。因にいふ同氏の本邦出發は、來年一月の豫定なりと。

八月五日、助教津田信夫氏は、依囑製作事業に關し、廣島縣へ出張を命ぜらる。

九月十日、教授川端玉章、同高村光雲の兩氏は、高等官三等に陞敘せらる。

同月十五日阪口朧氏は鑄金授業を、古宇田實氏は建築學授業を囑託せられたり。

○職員の入營者 助教千頭庸哉氏は、七月一日より九日間勤務演習のため、歩兵第一聯隊へ、雇増井兼吉氏は同日より三週間勤務演習のため近衛工兵大隊へ召集せられ、入營したり。

○第十二回本校卒業證書授與式 七月三日午前九時より本校校友會俱樂部に於て舉行したり。當日の來賓は、菊池〔大麓〕文部大臣、松井〔直吉〕専門學務局長、澤柳〔政太郎〕普通學務局長、田所〔美治〕秘書官、濱尾〔新〕、久保田〔鼎〕の兩前本校長を始め、前卒業生及卒業生の保證人等數十名。席定まるや、正木〔直彦〕學校長は式辭を述べ、卒業生に證書を、來學年の特待生に證狀を、本學年の生徒中の精勵者に精勵賞狀を授與したり。次に正木學校長は卒業生に對し訓諭をなし、菊池文部大臣は祝詞を述べられ、卒業生總代笹島秀彌氏答辭を朗讀して一先づ式を終り、各休憩所に於いて、來賓に茶菓を供したる後、一同を卒業製作及生徒成績の陳列室に案内して、縱覽せしめたり。當日文部大臣の祝詞、卒業生諸氏の姓名は左の如し。

菊池文部大臣の祝詞

本日東京美術學校第十二回卒業證書授與式を舉行するは諸子の爲に慶賀する所なり、而して諸子の今や此校を去らんとするに方り、聊か一言を陳べて以て諸子を送らんとす。夫れ方今我邦美術の趨勢を察するに、維新以來西洋の文物一たび入りてより、百般の事業大に面目を革め美術の如きも、亦昔日と其觀を同うせず、各其信する所に據りて、赴く所を異にし、千差萬別、孰れか是、孰れか非なる、明治の美術未だ容易に其基礎を定むるに至らず、美術應用の道、亦盡さざるものあり。古來本邦美術の沿革を按ずるに何れの時代を問はず、外國との交通一たび開くるに

逢ひては、美術の情勢も變遷を來すを常とし、應用の道亦隨て異れり、今の時も正に之に屬せり、此時に方り、諸子は五年の研鑽を積みて業を此校に卒ふ。我美術の爲に喜ぶべきことなりとす。然れども要するに藝術は畢生の業にして、驟に名工鉅匠と仰がれ、名を現代に成して一代の風尚を定め、榮譽を後昆に傳ふるの難きは、諸子の熟知する所なるべし、諸氏の學びし所多かるべく、得たる所亦尠からざるべしと雖、思ふて此に臻らば、自今而後諸子は果して如何の覺悟を以て、斯界に立たんとするか、蓋し諸子の目的とする所、各同じからざるべしと雖、宜く拮据精勵心を練り、技を磨き、以て教育に工業に、其他百般の事業に於て、邦人をして克く美術の趣味を理解せしめ、其志想を高尙にし、其應用の道を適切ならしめんことを務めざるべからず。諸子夫れ單く思を此に致し、寤寐府を忘れざらんことを勧めよ。

第十二回卒業業者姓名 計四十一人

永倉 茂〔中島〕 重丸 西方 俊三〔造〕 腹巻勝太郎 久野龜之助

(以上日本畫本科)

伊藤 繁延 田中 和一 長谷川綠邦 吉原 義雄 福岡 義雄
 澤津 昌利 横山 爲雄 金原 利一 井芹 市次 (以上日本畫選科)

神子 鐵雄 吉田 六郎 岡 四郎 速水 不染 (以上西洋畫〔本〕撰科)

小林 鍾吉 郡司卯之助 三井由太郎 安藤 靜也 蘆原 曠
 立見 淑 跡見 泰 橋本 邦助 森岡 柳藏 渡邊 亮輔

(以上西洋畫撰科)

小場 恒吉 (圖按本科) 森田 洪 (圖按撰科)

遠藤 忠雄 (彫刻本科)

毛利 教武 明珍 恆男 杉木〔本〕 傳 (以上彫刻撰科)

野村 陸雄 渡邊 諄二 (以上彫金本科)

紹美英之助 鈴木 義彦 (以上彫金撰科)

山本久次郎 (鑄金撰科)

守田 八郎 (漆工撰科)

特待生姓名 計十七人

山田 廉 (日本畫科一年) 大村 友雄 (同二年) 毛利〔利〕 教定

(同三年) 松岡 輝夫 (同四年)

森田龜之助〔補〕 (西洋畫科二年) 薄 拙太郎 (同三年) 谷 齊一

(同四年)

人見 鐵三 (圖案科二年) 澤田誠一郎 十二町貞吉 (以上同三年)

小倉右一郎 (彫刻科一年) 畑 正吉 (同二年)

水野 四郎 (彫金科一年)

永島 三郎 (鑄金科二年)

安江 雅勝 (漆工科一年) 常木 新藏 (同三年) 堀井 政吉 (同四年)

精勤者 計三十八人

山田 廉 伊藤 貞夫 近藤 治義 荻生 守俊 古賀 嘉六

飯島保次郎 森田 靜也 相馬治四郎 小倉 三郎 君島金三郎

小倉右一郎 吉田 祥三 吉田 政一 八卷於菟三 福田 淡

吉田 秀男 原田謹次郎 相馬 格平 相馬 正巳 小沼 直

森田龜之輔 竹内 定吉 遠藤 忠雄 木村第一郎 野村 陸雄

平木彌一郎 伊藤 繁延 内村 愛助 兒島虎次郎 岸畑 久吉

三井由太郎 杉浦 恭二 來海篤次郎 杉本 傳 白鳥 茂昌

正木 金吉 濱野鶴三郎 本間 良助

○新入學生 本月より本校へ入學し、本會員となられたるは左の九十九氏なり。

岸 熊吉 小藪 寛二 久保 提多 油井 忠助 坂内瀧之助
宮崎 定夫 中尾熊三郎 大畑 次郎^{〔三〕} 原田 傳^{〔得〕} 矢崎 文彌
六角 勘次 新聞 秀一 杉山^{〔田之〕} 宇内 石坂 武一 加藤 義明
武藤 直信 高桑 純吉 小川 巽 大越 直^{〔以上日本畫志望豫備の課程へ〕}

中村 元磨 吉田 苞 中野 修二 世古 温 小林永二郎
太田喜二郎 麻生 茂 有田 四郎 川北 元英 伊島 正次
松野 清 井上 達三 美作 武雄 柴田 三郎 土井 元生
松林 千里 安田 稔 大川 亮 島田 繁夫 澤田文次郎
武藤 直^{〔以上西洋畫志望、豫備の課程へ〕}

岡 雅雄^{〔島〕} 島海 豊 有瀬卯來雄 島 齊 仙石 貫造
別役 良民 藤田郁太郎 古田 立次 磯村 茂作^{〔以上圖案志望、豫備の課程へ〕}

小野 六郎 和田喜平次^{〔嘉〕} 小田 慈善 中野又吉郎 藤川 勇造
溝口 雷太 蘆野 廣 朝蔭圓次郎 小柴瀆四郎^{〔以上彫刻志望豫備の課程へ〕}

水野 鐵雄^{〔木〕} 本下 多聞 野生司述太^{〔以上彫金志望、豫備の課程へ〕}

林 謙^{〔以上鍛金志望、豫備の課程へ〕}
龜山喜太郎 甲谷 公 小栗 豊七 石塚 章 井上大次郎
西岡祐太郎^{〔以上漆工志望、豫備の課程へ〕}

桐谷長之助 山村 豊成 橋本 乾 福富 常三 永井 幾磨
^{〔以上日本畫撰科へ〕}

大久保健兒 松井英次郎 中野 營三 小島 貞良 尾崎 彦磨^{〔磨〕}
渡邊 省三 武藏野 弘^{〔以上西洋畫撰科へ〕}
小林和三郎 加藤 孝三 牧田 重雄 小林定次郎^{〔裕〕} 加藤 登一
佐藤 長吉 尾崎 教實 朝倉 文夫 池田 勇八^{〔以上彫刻撰科へ〕}

田淵 勇助 劍持 正行 井上 正^{〔以上彫金撰科へ〕}
細川 忠亮^{〔忠〕}^{〔以上鍛金撰科へ〕}

竹森 三次^{〔忠〕} 河面 冬一 森川 茂吉^{〔以上漆工撰科へ〕}
安村 行雲^{〔子備の課程〕} 豫備課へ再入學

平林 俊吉 水島 南平^{〔以上圖畫講習科へ〕}

○本校の夏季講習會 前號にも報したる如く本年夏期休業を利用して、七月二十五日より八月十四日まで、本校に於て本校教授岡田三郎助氏を主任講師とし、卒業生湯淺一郎氏講師として之を輔け、木炭畫鉛筆畫夏季講習會を開けり。講習者は各府縣の中學校、師範學校、高等女學校の教員にして總數八十二人（内女子三人）此内本校卒業生にして入會せしもの二十五人、三週間練習の成績としては、頗る見るべきものありしといふ。本會は毎日午後一時より四時まで開き、木炭畫、鉛筆畫を練習するを主とするものなるが、一面に於ては圖畫教授上の参考に資するため、文部省にては外國の學校生徒の成績並に本邦各府縣の學校生徒の成績を出陳し、本校に於ては圖畫教授に關し或は圖畫修業に關する内外國の書籍、圖畫の寫眞版及び内國の畫手本を蒐めて一室に陳列し、別室には本校卒業生、生徒

の製作品並に内國に於る繪具刷毛の標本、佛國より取寄せたる陶器繪具及用具等を陳列して閱覽繙讀の便を圖り、又本校文庫を開放して、適意に觀覽せしめたるを以て、講習者は實習以外に斯の如き設備あるを喜び、炎暑中にも拘はらず、午前及休息時間には各自思ひ思ひに前記の室に入りて研究し、其用意の周到懇篤を謝する旨申出しものも尠からざりしといふ。

○下村「觀山」教授の著英 英國留學の途に上りたる同教授は、去る四月十七日、無事英國に着し倫敦府ガワストリート八十番に寄宿する旨先頃通知ありたり。

○海野「美盛」教授一行の著佛 同教授の一行が、四月十八日本邦を出發せし趣は、前々號に報じたる如くにして、四月三十日香港に碇泊し、海上頗る平穩にして、六月七日馬耳塞港に上陸し、同月八日巴里に着したる由なり。

○和田英作氏の歸朝 久しく佛國巴里に留學したる和田英作氏は、留學の期滿ち、去る七月十五日無事歸朝せられたり。

○アリヴェー氏胸像懸賞の決定 前號に記したる如き懸賞法を以て作品を蒐集し、審査の結果、肖像の方(甲)は本山辰吉氏一等賞を、水の谷鐵也氏二等賞を、杉本傳氏三等賞を得、臺の方(乙)は杉本傳氏一等賞を、水の谷鐵也氏二等賞を得たり。

○聖路易博覽會本校出品 明年四月三十日より十二月一日まで、北米合衆國ミソリー州セントルイス市に於て開かるべき萬國博覽會へは、觀覽人の注意を惹くべき程の出品をなさんとて、本校に於ては出品取調委員を任命して、頻りに其調査を爲しつつある趣なるが、何分にも其費用少額のため、出品方案につき種々考慮中なりと。

教室雜俎 [同]

○日本畫科四年 前學年にあつた我級の事を二つ三つ書いて見やう。

洒落の様な間違ひ

前學年末に、日本畫科各級合併の競技會が開かれた。其畫題は艶美と云ふので、薔薇や堇の香ひゆかしく、一堂の許に陳列せられたが題が題だけに寔に美々しく見受けられ、孰れが良いとしまり、いあつべき様もなかつた。蓋し開校以來嘗てなかりし面白き催しで、相互に裨益せし事幾何なりしぞ。諸作に就ては諸先生方の御高評もあり、又仲間の下馬評も中々盛であつたが、今は彼は喋べらぬが花だらう。たゞ是のみは罪のない話だから一寸書いて置かう。そは或日の事、教授先生方打連れて陳列の場へ臨まれ、色々と面白き批評が始まつた。聽て某教授の「松岡〔輝夫・映丘〕君の畫風の優めかしい處は、幾らか寛齊〔森寛齋〕風だね」と申さるゝと傍に控へたる或先生したり顔になりて、「然、此人は關西です、尤も千葉縣へは只籍を移して居る計りだ相で」と、やつてのけられた。

失敗の暁

我級にさる一人の武骨男がある。今回圖らずも一大事到來し、艶美と申す異な畫題が出されたので、此男大弱り、但し此男に取りては恰ど木で鼻を括る様な難題であるから、荏苒幾日に及んでも、更には思はしき好案が浮ばない。果ては自暴自棄になつたのであらう、態と大作の臨畫などをやつて居る。それでも猶意地になりて、苦心の様子に噓氣にも顯はさないから、外觀よりは中々悠々然たる風にも見えたが、其實内心は燃ゆる計りの思をなして、煩悶して居たので

ある。かくて締切も早や五日前と切迫して来た。最う一刻も猶豫すべきでないから、まゝよ失敗するなら失敗れ笑はゞ笑へと、妙に度胸を据へ、例の皮肉屋さんの悪口、否難有き御忠告も一切馬の耳で、柄にも似合はぬものを惣にやり始めた。すると案の定巧く仕損じた。待ち構へたる喝采は満場に起る。こはとは思へども何食はぬ顔で描き直す、又々失敗る、愈々失敗して愈々悶躁く、此男の心緒亂れて絲の如し。最う締切迄はたつた二日、迎も並々の事では埒が明かぬから、是非なく非常手段を探るべく決心した。乃ち翌朝午前三時にはね起きて、前夜に貼つた假張を昇ぎ、半ば大地に牽きずりながら、風に推されてすげなく走せ行く。生憎途中でポツリ／＼雨が降り出した、俵を尋ぬれど明け方なれば影だに見へず、天はどこ迄も此の男に幸せないで、癢に觸る事限りなし。泣顔に蜂とは情ない。濃々濡になりて漸く五時頃校門へ漕ぎつけ、潛戸推して入らんとすれば、固く鎖して開かず、雨は益々降りて進退は茲に谷まる。ア、如何はせんと思案擲首萎れて居ると、派出所の巡查が怪んでこつちへ向つてやつて来る。アハヤと云ふ間際に嬉しや小使君が、開けて呉れたので、轉がる様に駆け込み、投げるが如くに假張を下しホツと一息ついた。

に垂んとする頃、誰あらむ、階段を一つ置位に大腿に、足音高く昇り來り、臆て筆洗場で遽しく顔を洗ひ捨て、我こそは今日の先登校者なるぞと、心の内で呼はり、瞳と勇ましく鬨を排して飛び込めば、豈計らむ件の男が丁とやりて居るので、先生吃驚、乍例の流儀で天を仰ぎ「オヤァッ！」と、絶叫したのは誰？大極〔渡辺忠三郎〕君其人であつた。

口繪道樂

此頃本郷大道の夜店、或は下谷邊の古本屋は到る處、口繪の拂底を來して居るから、定めて是を憾むで居る方も多からむ。又开を訝かしく思ふて居らるゝ人もあらうが、其仔細を語らば、諸君は頓返答でウンと、頷かるゝであらう。そは根津黨の旗頭で夫れありと知られた、榎亭佐治友八君が、遊ぶにも常に繪事を忘れず、隙あれば何時も犇々と、此方面へ出馬せられ、適れ勝れし口繪もがなと、蚤取眼で片端からかき交せて、當るを幸ひ切りとりなき倒し、是を蒐めて無上の樂みとして居らるゝからである。敢て畫の巧拙に關せず、只滔々と買収せらるゝ勢は、寔に堪感しいものだ。試に杖を本郷大道の夜店に曳きて見よ時々口繪が些とも見當らぬ事がある。こは既に此君が荒し去りたる跡なりと知るべし。我は此君と本郷夜店で御鉢合せをする事が、折々あるが、是は或夜の事であつた。我は他用ありて本郷大道を通り蒐りしに、例の夜店へ時めく大家の口繪が夥しくあつた。こはとは思つたが、生憎囊中に要意がなかつたので、態と目印をつけ明晩を約して去つた。さて翌晩茲へ來て見ると、最う最う夫れは疾くに、御生憎様になつて居た。はつても是は仕損じたり、後れて人に制せられて…とは思つたが、噬臍の悔であつた。

其後四五日して、君の寓を訪問せし事ありしに、思ひきや、先夜可惜買ひ逸した夫れが、目印の折目も其まゝに、机上に丁と並べてあらうとは。そこで我は可笑しさを怵へて、君が意外の掘出に蠢めく自慢の鼻を、一番拗じ折りてやらんと、先夜の一伍一什を物語り、果ては絶へ入る計りに大笑ひした事がある。

隙ありて君の寓居を叩かんと思ふ人よ、坐に着かば先臍を床間へ移して見給へ、必ず匣中口繪滿々で、正に其蓋の四五寸も、擡りて居るのを認むるであらう。若し夫れ、君が藏せる口繪を残らず觀る事を得、而かも同圖が二枚宛もあるものある事を知らば、再び其熱中なるに驚くであらう!!! (局都生稿)

東京美術學校近事〔二二二。M・三六・十一・一〇〕

○前號掲載後に於ける職員の動靜左の如し。

九月二十一日、囑託關係之助、書記屋代鉸三の兩氏は、本校各科第四年生京都奈良地方へ修學旅行に付、出張を命ぜらる。

同月二十九日、助教授羽田禎之進、同玉田文作、書記野田義守、雇増井兼吉、同森田國藏、同加藤橋松の諸氏は、本校生徒日光地方へ修學旅行に付、出張を命ぜらる。

十月一日、勤務演習のため歩兵第一聯隊へ召集中なりし本校助教授千頭庸哉氏は、解隊せられたり。

同月十日、雇菅野眞氏は從來の雇を解かれ、更に本校英語授業補助を囑託せられ、文庫掛を命ぜらる。

同月同日、香取秀治郎氏は、本校鑄金史の授業を囑託せらる。

同月二十四日、助手和田英作氏は、本校教授に任ぜられ、高等官六等に叙せらる。

○休職滿期 本校助教授田中後治氏は、九月十五日を以て休職滿期となれり。

○學科増課 外國語の力を養はんため、本學年より各科二年生へ之を課せられたり。

○奈良京都への修學旅行 例によりて本校各科第四年生本科十一名、撰科二名は關教員指導の下に於て、九月廿六日より十月十二日まで十七日間を以て、奈良及京都へ修學旅行をなせり。奈良に返ること六日、其近傍古社寺の建築什寶を觀覽し、其中九月三十日は法隆寺を經、芳野山に赴きて一泊し、殿堂什寶を見、風色を寫し、遺跡を弔ひ、歸路雨を冒して、如意輪堂下より間道を取りて、芳野河畔の上市驛を過ぎり、比曾寺、壺阪寺を巡覽せり。十月三日奈良を發し宇治を經て京都に入り、附近社寺の建築什寶の研究を遂げて、十月十二日一同歸京せり。奈良に在るの日、同地に滞在せらるゝ本校卒業生の新納忠之介、中島袈裟彦、明珍恆男の三氏は、一行のため、大に便宜を圖られたるは謝する所なり。

○圖畫教育會の設立 本年文部省及本校に於て開きたる夏季講習會員諸氏は、從來本邦に於ける圖畫教育上に就きて、研究改良を圖るの途なきを憾みとし、其方法に關して協議する所ありしが、正木〔直彦〕本校長及白濱〔徵〕本校教授も毎に此事に焦慮せられつゝありし折柄なりければ、茲に圖畫教育會なるものを起し、毎年三回以上雜誌を發刊し、内外國に於ける教育事項を蒐め、また圖畫教育上に關する會員の意見も輯録して、以て相互に研究に資することと

なり、正木本校長を會長に、白濱本校教授を幹事に推し、來十一月會誌第一號を發刊せんとて目下頻りに其準備中なりといふ。同會規則は左の如し。

圖畫教育會規則（明治卅六年九月制定）

名稱

一 本會は圖畫教育會と稱し事務所を東京美術學校内に置く

主意

二 本會は圖畫教育の普及上進を圖るにあり

會員

三 本會員は圖畫教育に従事するもの及教育に關係ある有志者とす

功績ある人は名譽會員に推薦す

四 圖畫教育上卓絶なる技藝或は學識を有し又は斯道に著大なる

功績ある人は名譽會員に推薦す

役員

五 役員は會長一名、幹事及委員若干名とす

六 會長には東京美術學校長を推し會務の總理を乞ふものとす

七 幹事及委員は會長之を指名囑託す

八 幹事及委員は庶務會計を分擔整理す

九 庶務及會計を掌るものには事務の繁閑に依り報酬を贈ることあるべし

あるべし

十 會務中重要に屬するものは委員會に於て議決し會長の許可を得て施行するものとす

得て施行するものとす

雜誌

十一 本會は會旨を全うせんために毎年三回以上雜誌を發行し會

員に頒つ

講習會

十二 本會に講習會を置く 之に關する事項は別に之を定む

總會

十三 會長に於て重要と認むる場合又は會員多數の請求あるときは隨時總會を開くことあるべし

會費

會費

十四 會員は毎年一月中に會費として金七十錢を一時に出すものとす

十五 名譽會員よりは會費を徴收せず

○日光山への修學旅行 本校職員生徒一同は十月十四日東京を出發し、日光山へ修學旅行をなせり。同日は日光廟を觀覽して日光町に宿し、翌十五日は行く／＼風光を賞し、或は毛筆に或は油畫に、各寫生など爲しつゝ中禪寺に到りて一泊し、十六日朝中禪寺湖に船を浮べ、勝負が濱に上陸し、戰場ヶ原を過りて湯本に宿り、十七日歸京せり。旅行中天氣の都合宜く、唯歸路雨天なりしのみにて、楓葉は今を盛りに染め出で、滿山宛も錦繡の如く、誠に見頃なりしといふ。

○久保田〔讓〕文部大臣の本校巡視 文部大臣には先頃來各學校を巡回視察せられしが、十月廿一日、松浦〔鎮次郎〕祕書官及其他文部省の高等官數名と共に、本校に臨まれたり。

○紀念美術祭の舉行 本校にては毎年十月四日設置紀念日につき、其の式を舉行し來りしが、本年は創立十五年にも相當するを以て、美術上の關係者、卒業生、保證人等を招待し、其規模を大にして、十一月三日美術祭を舉行することとなり各料に於ては活人畫、演

劇、行列等の催しあり、其番組の數二十六七の多きに達し、各自非常の意氣込にて準備をなしつゝあるを以て、當日の盛況今より想像するに餘りあり、其詳細は次號の誌上に報道すべし。

関連事項

① 桜岡三四郎の留學

桜岡三四郎は、明治三十年一月二十三日付で本校助教教授となるが、翌三十一年岡倉校長退陣に殉じて懲戒免官となる。『鑄金近代史稿』（昭和三十一年四月。鑄金家協会）には、「明治三十一年、美術騒動によつて退陣した岡倉一派が日本美術院創立の企画を発表、鑄金家としては、岡崎雪声・桜岡散城（三四郎）・山本若次郎等が参加した。日本美術院には鑄金部が設置され、新人の養成にも当たった。ところが、鑄金部では和洋兩系統に分れ、衝突したため工場を分ける等して調整したが、石川浩洋〔鑄金科〕（美校第一回卒）を中心とする洋風鑄造が盛況を極め一時盛んになった。しかし、洋風は数年経ずして失敗、浩洋は仏印に渡つたので、その後は和風の独壇場ともなつた。ところが和風鑄造も三十六年頃にはつぶれてしまつた」とある。美術院鑄金部の創設が思うように進まなかつたためか明治三十二年後半の桜岡は、軍人としての生活に専念し、美術に復帰するのは、十一月二十二日に除隊して、十二月一日、谷中に鑄造研究所を開設してからである。明治三十三年五月十二日付で本校助教教授に復職、専ら依頼製作に従事する。鑄金科主任となつた三十五年に「鑄金術研究ノ為滿三ヶ年間佛國米國へ留學ヲ命ス 明治三十六年中本邦ヲ出發ス可シ」との通知を八月一月付で文部省から受ける。工芸

関係者としては初めての国費留學生である。留學中の消息については、『東京美術学校校友会月報』の通信欄に寄せた手紙などで知られるのみである。自由の女神像、ニューヘヴン記念標、シャーマン將軍像などの大型金属像の構造や設置状況などを紹介している。また鑄造工場を意欲的に見学、各種製造機械類のカタログ収集にも努めた。三十八年の春には、アラバマ州バーミングハムにて、当州よりセントルイス博へ出品された大像の鑄造にも関係した。三十八年秋にはニューヨークを離れ渡欧、それ以後帰国までの行動はほとんど不明である。以下三十六年以降の履歴を「東京美術学校旧職員履歴書」より転載する。

〔明治三十六年〕二月廿四日 東京新橋驛ヲ発シ横濱ヨリ汽船旅順丸ニ搭

シ米國留學ノ途ニ就ク

三月十四日 北米合衆國シヤトル港ニ上陸 廿四日紐育

府ニ入ル

〔同三十八年〕八月廿五日 明治三十九年四月廿日迄留學延期ヲ命ス

十月 七日 米國紐育港出發白耳義ヲ經テ佛國巴里ニ轉

學ス

〔同三十九年〕四月 日 留學満期ニ付佛國巴里ヲ出發シ古美術研究

ノ爲伊太利國ヲ巡歴シ更ニ轉シテ英國倫敦ニ入ル

六月 六日 回航ノ軍艦鹿島ニ便乗ヲ許可セラレ同國ボ

ーツマウス軍港ヲ拔錨シスキス運河ヲ經テ八月四日本邦横須賀軍港ニ上陸 即日東京